

保健体育科における CLIL 体育の教材開発に関する研究 —体育実技の授業実践を通して—

磯村 美菜子 富岡 宏健 岩田 昌太郎 重元 賢史 住田 哲太郎 齊藤 一彦

Abstract: The purpose of this study was to clarify the results and issues of CLIL Taiiku by practicing CLIL in PE classes at two different junior high schools. The goals and contents of the class were set according to the target grade, since different results and issues were obtained from each practice, it may be important to search for appropriate types of CLIL according to the area, unit, class content, in the future teaching program of CLIL Taiiku.

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症の流行は、これまでの学校教育の本質を問い直し、新しい教育様式との両立の実現を急務としてきた。その新しい教育様式の1つに ICT 機器の活用が挙げられ、体育科教育においても、運動観察場面や振り返りなどの認知的学習場面で活用されている。そして、体育での効果的な ICT の活用は「できる」と「わかる」を一体的に捉え、保健体育科の3つの資質能力のバランス良い育成を促進することにつながると考えられている（佐藤，2022）。他方，Society5.0時代の教育においては、教科での学習を日常生活の課題解決に生かす力が求められており（文部科学省，2020），その手段として，STEAM 教育などの教科横断的な学習がある。そこで，本研究では教科横断的な学習のうち，CLIL（内容言語統合型学習）に注目した。

CLLとは、教科の内容を通して外国語を学ぶ学習方法である（Coyle，2010）。CLILの主な特徴は、「content」「communication」「cognition」「culture」あるいは「community」の4つの軸を中心とした学習方法であり、それらは「4C」として総称されている。また CLIL は、教育効果を最大限に引き出すために、目的、頻度・回数、比率、使用言語など、授業の構成に関する柔軟性を持っており対象者に応じてそれらを選択することができる（池田，2011）。

このように、CLIL は附属学校の強みの1つである「グローバルな視点を取り入れた教育研究」として最適な指導方法の1つであるといえる。さらに、体育の教科の内容は、動きを伴うという点から言語習得のために優れた科目であるとされている（Coral，2016）。しかし、体育での CLIL の先行実践は未だ少なく、サッカーやバレーボールなどの球技（二五・伊藤，2017；二五・伊藤，2019）や跳び箱運動（濱本ほか，2020）、体づくり運動（二五・富岡，2020）に限られている。

2. 研究の目的・方法

2.1 研究の目的

これまでの体育に CLIL を取り入れた実践から、体育用語が知れたなどの言語に関する成果や、仲間との関わりを増やす効果があること、授業に積極的に取り組む態度に関する成果が報告されている（濱本ら，2020；二五・富岡，2020）。一方で、CLIL 体育の実践が少ない原因として、教材の準備に時間がかかることや、実技授業における安全確保のためであると考えられている。そのため、各領域に応じた CLIL の実践の積み重ねと新たな教材開発が必要であると考えた。そこで本研究では、2つの附属中学校（翠・三原）において、CLIL 体育授業を実践し CLIL 体育の成果と課題を明らかにすることを目的とした。

2.2 研究の方法

本研究で行った2つの授業実践の概要は表1の通りである。

表1 授業実践の概要

	実践1	実践2
日時	2021年9月～10月	2022年3月
対象	中学校3年生	中学校2年生
単元	マット運動	卓球
時数	5時間／8時間	1時間／10時間
教師	体育教師	体育教師

実践1では、マット運動を単元として選定した。単元の選定理由として、マット運動は中学生生徒にとって、小学校の頃から親しんでいる種目であり、技術構造が分かりやすいため、教え合いによるコミュニケーションが生まれやすいと考えた。また、CLIL授業の構成に当たっては、CLILの特徴を生かし、「頻度や回数」では、全8時間の単元のうち前半の5時間をCLILの活動を含む授業(Light CLIL)とした。また、「比率」においても、1時間の授業の一部でCLILの活動を行う(Partial CLIL)こととした。具体的には、毎回の準備運動や補助運動、技の特性の理解や技のポイントの探求活動においてCLILの活動を取り入れた。単元計画は表2の通りである。

表2 実践1の単元計画

時間	内容	言語
1	オリエンテーション・ヨガ マット運動の特性について	英語 日本語
2	前転系の技の探求	
3	前転系の技の実践・ 後転系の技の探求	
4	後転系の技の実践	
5	倒立回転系の説明・実践	
6	倒立回転系の実践	日本語
7	連続技の実践	
8	連続技の発表	

実践2では、卓球を選定した。単元の選定理由として、卓球は活動場所が制限されているため球技の中でも動きが少なく、ネット型の中でも安全性を確保できることが挙げられる。また、その中でも「狙う」というクローズスキルな

動きに焦点化することで「communication」が容易になるよう工夫した。CLIL授業の構成に当たっては、実践1と同様に「頻度や回数」では、全8時間の単元のうち1時間をCLILの授業(Light CLIL)とした。また、「比率」においても、1時間の授業のうち「狙った場所を伝える」という授業の内容においてCLILを用いた(Partial CLIL)。さらに、中学2年生で既習している現在完了形を用い、「I have been targeting～」のフレーズで「狙った場所を伝える」ために英語を使用した。

表3 実践2の単元計画

時間	内容	言語
1～5	ラリーを続けるために 必要なことは何か	日本語
6	ねらい通りに打つために 必要なことは何か	日本語
7		英語 日本語
8		日本語
9～10	自分に身についたことを 試合を通して確かめよう	日本語

2.3 研究の方法

実践1では、毎回の授業後に自由記述のアンケートを実施し「4C」の視点から成果と課題を帰納的に分類した。実践1の結果から、「言語」の視点に関する内容が多くみられたため、実践2では、体育授業の分析で用いられる形成的授業評価アンケートを実施した。アンケート項目は4次元からなる9項目で構成されており、「はい」を3点、「どちらでもない」を2点、「いいえ」を1点とした3件法であった。分析の際には、各項目における平均点を算出し、5段階の診断基準に沿って評価を行った。また、9項目に対して、本授業の目標に応じ、該当の「4C」の要素を適用した。

さらに、CLIL体育の授業後(8時間目)に自由記述形式で、①英語で体育をしたことでよかったこと、②英語で体育をしたことで難しかったこと、③使用した英語、④覚えた英語についてのアンケートを実施した。

3. 成果と課題

(1) 実践1における成果と課題

実践1の自由記述アンケートの結果(表4)に基づいて「4C」の視点から成果と課題を述べる。

はじめに、一番多く記述のあった「言語」の視点である。「言語使用の継続」に関する記述から、同じ活動を継続して行うことや、同じ単語を繰り返し使うことで、英語を使用することに慣れることができたということが窺えた。他方、体育で英語を使用することについて、以下の「自然な英語」に関する記述から、体育で英語を使用することで、単語を自然と覚えられることや、間違えていても伝わるということを実感できたということがわかった。一方で、「正しい英語学習」に関する記述からは、正しく英語を学びたいといった意見もあり、英語学習への意識の差があるということが明らかとなった。

さらに、「英語の難しさ」や「英語の聞き取りづらさ」記述からも、使用する文法がわからないといった難易度や、英語の聞き取りづらさに関する課題があることが分かる。マスクの着用も聞き取りづらさに影響していることが考えられる。教師自身に多少の「恥ずかしさ」があったことも否定できない。これらの課題に対し、繰り返し指示をしたり、英語の後に日本語を繰り返したりすることで、説明に時間がかかってしまうということが懸念される。

これらのことから、「言語」の視点においては、CLIL 体育を継続することで書くことを中心とした英語の使用に慣れることや、自然と英単語を覚えることができるという成果があった。一方で、上記の課題を解決するためには、CLIL 体育の目標を明確化し、言語と内容のバランスを考慮する必要があるということが考えられる。

次に、「内容」の視点から述べる。CLIL 体育の内容全体に関して、「非日常性」に関する記述から普段の体育授業と比べて非日常感や新鮮さがあるといった印象があったということが分かる。また、「言語イメージ」や「意識性」に関する記述から、技の名前や技の出来を表す形容詞などの英単語をキーワードとして捉えることで、意識的な運動につなげることができているということが窺える。一方で、ブリッジ例のように、耐久力を要する運動や、複雑性のある動

きについては英語で行うことに適さない場合があることを考慮しなければいけない。

これらのことから、「内容」の視点においては、英語にしやすい種目の選択が重要であることや、英語にすることで動きがイメージされやすい活動を検討し取り入れることが必要であるということが考えられる。

次に、「思考」の視点から述べる。「思考」に関する記述からは、「想像する」「考える」といった、探求的な学習が英語の使用を促す動機づけとなり、CLIL 体育を活性化させるということが窺える。一方で、考えたことを英語にすることが難しい場合もあるため、適切な足場かけが必要であるということが考えられる。

最後に、「協学」の視点から述べる。「対話としての英語」に関する記述から、グループでの関わり合いの際に評価する英語を用いることが効果的であると予想される一方で、アドバイスなどの高度な表現は日本語で行うべきであるということが考えられる。

これらのことから、「思考」・「協学」に類する活動は授業を活性化させる一方で、それらの活動に対する適切な足場かけが必要であるということが窺える。

実践1の成果と課題から、CLIL 体育に対して好意的な印象を持った生徒が多いことが分かった。生徒の記述からも、「マットは嫌いだが英語の要素があり楽しかった」というものも見られた。そこで、体育が苦手な生徒でも授業での関わり合いが増え、体育の好き嫌いの二極化の解消に影響を及ぼす可能性があると考えられる。一方で、実践1の成果と課題を「内容」と「言語」の視点からみると、主に「言語」に偏っており、体育の内容的な視点からの成果と課題について精査する必要があることが考えられる。特に、「内容」における成果として取り上げた「言語イメージ」や「意識性」については、CLIL 体育の可能性として引き続き検証していきたい。



探求活動の様子(実践1)

表4 自由記述のまとめ（実践1）

CLILの「4C」	カテゴリー	記述内容
言語 Communication	言語使用の継続性	<ul style="list-style-type: none"> ・前回よりすらすら英語でポイントが書けた。 ・英語で書くのに前より慣れてきたような気がした。 ・何度も同じ単語を使うから覚えやすい。
	自然な英語	<ul style="list-style-type: none"> ・体育の英語はきっちりしていなくても伝われば良いというところが気楽にできて良い。 ・初めて知る英単語などを自然に覚えようとしていて、体育など他の教科で英語を使うのはいいと思った。
	正しい英語学習	<ul style="list-style-type: none"> ・英語も大事だから、英語を取り入れるなら明確に日本語も示してほしい。 ・日本語⇒英語の順で示してほしい。
	英語の難しさ	<ul style="list-style-type: none"> ・英語が難しかった。文法が分からないので時間がかかった。「順番にマットに接触させる」など。 ・英語で表現するのが難しかった。
	聞き取りづらさ	<ul style="list-style-type: none"> ・英語の指示はちょっとわかりづらかったのと、ききとりづらくなっていうことがありました。 ・もう少し大きな声で英語の指示をしてもらいたい。
内容 Content	非日常性	<ul style="list-style-type: none"> ・非日常的で面白かった！ ・新鮮な感じがして面白かったです。 ・気分転換になってよかった。
	言語イメージ	<ul style="list-style-type: none"> ・英語で表現するのは少し難しかったが、英単語特有のニュアンスや単語からイメージできることによってより体の動きなどが分かりやすくなることもあったと思った。 ・Wheel で車輪をイメージしてできた。
	意識性	<ul style="list-style-type: none"> ・体育は運動するだけというイメージがあったが、英語を使用することでより意識の高い運動につながられていいと思います。 ・英語で表現することで重要なところがはっきりして分かりやすかった。
	言語と動作の変換	<ul style="list-style-type: none"> ・ブリッジしてる時辛いのに英語でいわれると変換するのやばすぎてブリッジ疲れしました。
思考 Cognition	英語で考えることの楽しさ	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで単語や意味などを予想するのが楽しかった。 ・プリントに書くときに英文を皆で考えるのが楽しかった。 ・新出単語も多かった。意味を推測するのが面白かった。 ・英語でポイントを考えるのが楽しかった。
協学 Community	対話としての英語	<ul style="list-style-type: none"> ・ポイントや感想を言い合うときにも英語を使うと面白い（interesting）なのではないかと思いました。 ・I want to use the words to reaction. ・アドバイスは英語でしにくかった。

表5 形成的授業評価のまとめ（実践2）

	次元	成果			意欲・関心		学び方		協力	
	項目	感動の体験	技能の伸び	新しい発見	精一杯の運動	楽しさの体験	自主的学習	めあてをもった学習	なかよく学習	協力的学習
時間	4C	content	content	cognition	content	content	content	content/cognition	community	community
7 non CLIL	数値	2.41	2.85	2.83	2.94	2.94	2.81	2.80	2.96	2.90
	評価	4	5	4	4	4	5	4	5	5
	数値	2.70			2.94		2.81		2.93	
	評価	5			4		5		5	
8 CLIL	数値	2.44	2.76	2.74	2.93	2.83	2.91	2.80	2.89	2.83
	評価	4	4	4	4	3	5	4	4	4
	数値	2.65			2.88		2.86		2.86	
	評価	4			4		5		5	

（2）実践2における成果と課題

実践2の形成的授業評価の結果（表5）に基づき、4つの次元から成果と課題を述べる。

まず、「成果」に関して、CLIL 体育において全体評価を1つ落としている。その中でも「技能の伸び」の項目が評価を1つ落としているが、本実践が第2次の3時間目であり、新たな技能習得を目的としていなかったことが考えられる。一方で、本授業の目標は、「ねらい通りに打つために必要なことは何か」であったため「考えたこととできたこと的一致」を「技能の伸び」としてとらえていなかったという可能性も考えられる。

次に、「意欲・関心」においては「楽しさの体験」が減少している。自由記述から、「英語を使うことによる複雑さ」を感じている生徒も多くみられたため、「楽しさの体験」に影響を及ぼしたということが考えられる。

さらに、「学び方」について、他の次元と比べ CLIL 体育における数値が通常体育を上回っていることがわかる。特に、「自主的学習」において数値が大きく Non CLIL 体育を上回っていることから、英語の課題が与えられたことで話そうとする意識が向上したということが考えられる。また、自由記述の結果からも「意識的なコミュニケーション」といった視点が表出されたことから、英語の使用場面と使用方法を限定することで、目的を持った体育の学習に寄与

していたことが考えられる。

他方、「協力」に関しては、数値で通常体育を下回っており、仲間との関わりを増やす効果があるという先行研究（濱本ら、2020；二五・富岡、2020）と異なる結果となった。

以上のことから、実践2の成果として体育に CLIL の視点を取り入れることで、活動の目的が焦点化され、「わかる」と「できる」をつなぐ手段となりうるということが考えられる。他の領域においても同様のアプローチが可能かどうか引き続き検証していきたい。

（3）本研究における成果と課題

本研究では、2つの異なる附属中学校において異なる体育実技内容での CLIL 体育を行った。それぞれ対象学年に合わせて、CLIL 授業の目標と内容を設定し、成果と課題を検証した。実践1では、授業の導入と技のポイントについての探求的な活動において CLIL を取り入れた。実践2では、CLIL を取り入れる目的をより焦点化し、「わかる」と「できる」をつなげるための手段として CLIL を取り入れた。それぞれの実践から異なる成果と課題が得られたことから、領域、単元、授業内容などによって適切な CLIL のタイプを模索することが、今後の CLIL 体育の学習においては重要となるのではないかと考えられる。

特に、次の3点に関する CLIL 体育について、

体育の内容的視点から引き続き検証していきたい。

1) 実践1で特出された「言語イメージ」や「意識性」などの「技能」に着目した CLIL 体育実践。

2) 先行研究の成果として挙げられている「関わり合いが増える」などの「協学」に着目した CLIL 体育実践。

3) 実践2の「わかる」と「できる」のつながり目として「技能」と「言語」に着目した CLIL 体育実践。

また、2つの実践から得られた共通の成果として、体育が実践的な英語使用の場となったことや、英語学習への動機づけとなったことが挙げられる。そこで、今後は英語科との連携の上、CLIL 体育の英語の内容的視点から見た成果についても検証していきたい。

引用（参考）文献

- 1) Coyle, D., Hood, P., and Marsh, D. (2010). *Content and language integrated learning*. Cambridge University Press.
- 2) 濱本想子・白石智也・赤松一成・敖敦其其・白石愛・辻亮太・大城穂乃香・磯村 美菜子・岩田昌太郎 (2020) 「小学校における CLIL 体育の授業実践に関する事例研究－「跳び箱運動×感嘆詞」の内容的視点から－」, 『学校教育実践学研究』, 第 26 巻, pp.47-58.
- 3) 池田真・笹島茂 (2011) 『CLIL 新しい発想の授業：理科や歴史を外国語で教える！？』三修社.
- 4) 池田真・渡辺良典・和泉伸一 (2011) 『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第1巻 原理と方法』上智大学出版.
- 5) 池田真・渡辺良典・和泉伸一 (2012) 『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第2巻 実践と応用』上智大学出版.
- 6) 池田真・渡辺良典・和泉伸一 (2016) 『CLIL

(内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第3巻 授業と教材』上智大学出版.

- 7) 磯村美菜子 (2021) 「マット運動の授業における CLIL 体育の実践に関する研究」, 『広島大学附属中・高等学校中等教育研究紀要』, 第68号, pp.87-93.
- 8) Josep Coral・Teresa Lleixà (2016) *Physical education in content and language integrated learning: successful interaction between physical education and English as a foreign language*. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 19 : 1, pp.108-126.
- 9) 二五義博・伊藤耕作 (2017) 「高専 1 年生に対する体育 CLIL の可能性－英語を使用したサッカーの授業を事例として－」, 『大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要』, 第 14 号, 2017 年, pp.125-142.
- 10) 二五義博・伊藤耕作 (2019) 「高専 1 年生に対する体育 CLIL の可能性(2)英語を使用したバレーボールの授業を事例として」, 『大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要』, 第 16 号, pp.139-156.
- 11) 二五義博・富岡宏健 (2020) 「小学校における体育 CLIL のあり方について：中学年の体づくり運動を事例として」, 『日本児童英語教育学会研究紀要』, 第 39 巻, pp.191-207.
- 12) 文部科学省 (2020) 『令和3年版 科学技術・イノベーション白書 Society 5.0の実現に向けて』
- 13) 佐藤豊 (2022) 「体育における一人一台端末活用の特徴と課題」, 『体育科教育』, 第70巻, 6号, pp.12-16.

実践1の授業シナリオ① (CLILの活動を行った部分のみ)

	学習活動	指導上の留意点
導入	<p>①マット運動をなぜやるの？</p> <p>質問1 マット運動の特性は？ (漢字3文字で)</p> <p>マット運動</p> <p>特性： ___ ___ ___</p> <p><u>extraordinary</u></p> <p><u>unusual</u></p> <p>⇒ 普段、足が下で頭が上だけでも、回転したりねじったりする = 非日常の動き</p> <p>質問2 どんな力が身につく？ (カタカナ6文字で)</p> <p>体を<u>コントロール</u>する力</p> <p>⇒ 怪我や事故の時に役立つ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・板書に当てはめて考えさせる ・ヒントとして、<u>非</u>の下に <u>extra, un</u> 書く ・下線部分すべて同じ意味になることを説明 ・生徒の予想を埋めながら下線部を埋める
展開	<p>②YOGA</p> <p>質問3 これは何でしょう？ (ヨガのポーズの板書)</p> <p>⇒ YOGAのポーズである</p> <p>○ “pose” という動詞の意味の説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ポーズする ・<u>なりすます</u> <p>⇒ なりきってやろう</p> <p>○ 実践</p> <p>Tree, Eagle, Hero, Cat and Cow, Yawing cat</p> <p>Rabit, Frog, Baby, Fish, Bridge, Flower, Cockroch</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>YOGA</u> と追記 ・ これはどんなポーズでしょう？ と予想させながら

実践1の授業シナリオ② (CLILの活動を行った部分のみ)

	学習活動	指導上の留意点及び『教師の掛け声』
導入	<p>○なぜ英語を使うかについての説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ・CLILとは言語学習方法の一つ ・ヨーロッパなどで盛ん ・体育なので、間違ってもいい (もちろんテストには出しません！！) ・単語で意外と伝わるじゃん ・動きながら英語がわかった！！ ・うまく言えなくてもいい <p>⇒ など良いところをみんなで一緒に見出していきたい</p> <p>○今日の目標の確認</p> <p>: Perform the skills which are categorized into the <u>forward roll group smoothly and steadily</u></p> <p>≡ <u>Let's perform the skills of the forward roll group (前転系の技を滑らかに安定してできるようになろう！)</u></p> <p><u>Smoothly</u>・・・今日はここを探そう！！</p> <p><u>Steadily</u>・・・repeatedly (連続して)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りを踏まえながら説明例) 非日常、頭を使った、楽しかった、印象に残った ⇔ 日本語の後に英語を出してほしい。英語だとわからない ・すでに技ができる人は、ポイントを探して教えるとともに、連続してやったり、手をつかずに立ち上がったりするなどしてレベルアップさせることを補足する。

<p>○質問1 開脚前転 (Straddle forward roll) は英語でなんという？ ヒント：skills of the forward roll group ⇒前転は、Forward roll Straddle=またぐ …陸上のベリーロールと同じ (straddle roll)</p> <p>○質問2 体の部位の英語を挙げてみよう head(top of/back of), neck, shoulder, arm、wrist, hand, elbow, back, lower back, ankle, leg, foot, toe heel</p> <p>《準備運動》 ①じゃんけん柔軟 掛け声「Rock, paper, scissors」→「one, two, three」 ②ストレッチ ・ touch toe ・ stretch neck ・ rotate sholders ・ bend knees ⇒stretch the side</p>	<p>① 『Stand facing each other, and open your legs like this』 『When you lose, open your legs little by little.』 『Winners～?』 『Congratulation!』</p> <p>② 次回からはペアでストレッチを行うので覚えておく。</p>
<p>《補助運動》 ①ゆりかご (rolling) ②ゆりかごから背支持倒立 ③エビのポーズ ④ブリッジ</p> <p>○グループ活動 ・ワークシートに気づいたポイント記入 (英語または日本語) しながら技の練習</p>	<p>① 『roll from your back of the head and back and lower back smoothly』 ② 『put your shoes on the floor』 ⇒ 『put your knees on the floor』 ③ 『put your feet(legs) and hands close to each other and stand up!!』</p> <p>・お手本は上手い人か、前のモニターで確認する</p>

注) 実践1の実際の授業の詳細については、引用(参考文献)の7)の磯村(2021)より参照されたい。